

分野： (3) 気管支ぜん息・COPDの動向等に関する調査
① 気管支ぜん息の動向等

(3)-①

業務委託名： 小児気管支ぜん息の重症化予防と効果的寛解導入を目指す多層的プログラム開発に関する研究

調査研究代表者氏名：藤澤 隆夫

1 評価項目						
5点:大変優れている(A判定) 4点:優れている(B判定) 3点:普通(C判定) 2点:やや劣っている(D判定) 1点:劣っている(E判定)						
	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
(2) 研究成果目標の達成度	0人	5人	0人	1人	0人	3.67
(3) 研究計画の妥当性	0人	2人	4人	0人	0人	3.33
個別評価(第3評価):(2)(3)の平均						3.50
(6) 総合評価(第2評価)	0人	4人	2人	0人	0人	3.67
全体評価(第1評価):(2)(3)(6)の平均						3.56

2 記述評価
<p>・藤澤班のデータにおける重症者の長期フォローアップ者のV-V Curveの詳細を更に検討してもらいたい。</p> <p>・治療介入のところが大いに問題であり、専門家が選択するからという理由で自主性に任せて三択のいずれかにより治療して評価するというプロトコルは、科学的な手法として許容されない。作業仮説を立て、回答を得るためのオーソドックスな研究計画を立てたうえで今後の研究を進行させることが必要だと考えられる。</p> <p>・我が国の小児気管支喘息診療の中心的機関を中心に構成された研究班を作ったことは評価できるが、その弊害も見られるように思われる。コントロール不良群の治療を班員の裁量に任せ、その結果をまとめることにより、小児気管支喘息のコントロール不良例に対する適切な治療法の策定に進む足掛かりを見つけようというのは、班研究としてあまりにも悠長ではないか。治療を班員の裁量に任せるのであれば、少なくとも短期間でその結果を検討する場を設け、代表研究者が研究班としての介入の方向を示せるようにすべきであり、それが班員の意向でできないのであれば、班員の入れ替えも必要ではないか。</p> <p>・経験豊かな実際の診療の中から、問題点をピックアップして、すすめている重要でユニークな研究であることは評価できる。</p> <p>・前向き研究については、状況、条件、基準、母集団などを明確にして、進めることにより、より明確な成果が得られると思われる。</p> <p>・小児気管支喘息の実態把握を継続している。</p> <p>・長期の調査研究が必要な重要な課題に取り組まれていると理解するが、2ヶ年計画という制約のなかでの目標は明確して研究を進める必要がある。</p>